研究課題：ライプニッツの「いわゆる根本の問い」について

哲学の歴史において「無」は極めて重要な概念である。にもかかわらず、哲学者達のこの言葉の用い方は、多くの場合、きわめて無造作である。その結果、この言葉と関連する事態についての哲学者の議論は、大きな問題を孕むことになる。そこで本研究は、ライプニッツの「いわゆる究極の問い」つまり「なにゆえ無ではなくてむしろ或るものが存在するのか（Cur aliquid potius existat quam nihil?）」という問いに見られる「無」の意味を考察することにしたのである。というのも、この問いは一部の現代哲学者達によって、今なお究極の問い（the ultimate question）として問われ続けているからである。それは、（この問いを「形而上学の根本の問い」と呼んだハイデガーに顕著に見られるように）ありとあらゆる存在の根拠を問うている、と考えられてきた。そしてライプニッツ研究者までもが、こうしたハイデガーの理解に従っているのである。しかしこの問いが究極的であると言うならば、当然、そこで語られる「無」もまた究極的な概念でなければならない。実際、この「無」は、多くの哲学者が「まったく何もないこと」と理解しているのであるが、本研究は、そうした理解が少なくともライプニッツ自身の文脈においては誤りであることを明らかにした。と言うのも、ライプニッツ自身がこの問いを問うている文脈を確認すると、この問いに対する彼の答えは「可能性は現実化しようとするからである」というものであるからである（さらに言えば、そもそもどんなものであれ「根拠」と呼ばれるものは何らかの存在を持つのであり，そういう意味では，その「無」が究極的だというのであれば、「無ではない」に先行する根拠はありえないことになり、問いそのものが擬似問題であることになる）。つまりライプニッツがここで言及している「無」は、一切の存在根拠とされた神すらも存在しないという「端的な無」ではなく、「或るものが現実存在していないこと」すなわち「或るものが現実化しておらず、可能性に留まっている」ということ、すなわち「可能性」を意味しているのである。ライプニッツがその語彙の多くを負っているアリストテレスが既に述べているように、現実性を存在とするならば、可能性は無である。したがって「或るものの無」とは、「或るものが完全に存在しない」ということではなく、「現実化しておらず可能性に留まっている」ということなのである。つまり、あの問いが意味しているのは、「なぜ或るものが可能性に留まらず、現実存在している（existat）のか」を問うているのである。そこで「存在」という語が、esse ではなく、existere というラテン語が用いられているのはそのせいである（existere という動詞は、「可能性ではなくて現実存在する」という意味を持つ）。あの問いがこうした意味を持つものであるからこそ、「可能性は現実化しようとするからである」ということがその答えでありうるのである。したがってライプニッツに限って言えば、かの問いは、あくまでも「或るものが可能性に留まらず、現実存在しているのはなぜか」を問うているのであって、神をも含めた一切の存在の根拠を問うものとは言えない。あの問いは、究極の問いではないし、そこで語られる「無」も究極の無ではない。ライプニッツの問いは、ハイデガーが解釈したように、究極の問いではない。ハイデガーも現代形而上学の研究者達も、究極の問いを捉え損ねている。現代形而上学の研究者やライプニッツ研究者までもが、ハイデガーの権威に無批判に従っているのである。では、本当に究極の問いと呼べるものは何か。これまで誰一人指摘したことがないのだが、それは、（拙著が主張したように）「まったく何もないのか、それともそうではないのか」なのである。